鴻

鷗

石樹千亦著

鷗

鷗

石穆千亦著

石樓千亦著

馮

石搏千亦

私は南海道なる伊豫に生れた。私が鄕里を出たのは十七歳の時であつた。その後此處彼處を歩いて、東京に來てからでも、まう三十年餘になる。この間に公務や私用でよく諸方を旅行した。その中でも最も多く往來したのは北海道である。

私が大正四年に出した歌集「潮鳴」の中にも、かなり多く北海道の作を載せた。その後の六年間に、この方面に旅行したのは八回で、實に年一回巳上になつて居る。そしてその間に

郷里を訪うたのは唯三回で、二年に一回といふ平均になつて居る。北海道は元來私の好きな地方である上に、かく度々旅行をする爲か、故郷以上の懷しみを持つ樣になつて來た。

平素なまけ者の私は、近來一向に作が無い。偶々有りとすれば、旅行の歌に限られて居る。竹柏園先生が今年の大會の爲に「潮鳴」以後の作を集めてはどうかといはれたので、急にあさつて見ると、殆と北海道の歌と、極少數の郷里の歌があるばかりだ。集として殘す程の作は一つもない。併し同時に

私の生れた郷里と、私の好きな北海道との歌のみだといふので、さすがに棄て難い感じもせらるゝのである。

私の好きな怒れば天をも突く北の海、私の懷しいとこことはに風靜もつてゐる南の海、その孰れに往つても、極めて自由に、極めて快活に、羽翼をのばしてゐる鷗よ、私は愛するお前の名をこの集の名にかりたいと思ふ。鷗お前も喜んで許して呉れるであらう。

大正十年三月

著　者

目次

北の海……一
南の海……五七
波の飛沫……七一

北の海

小樽を出でて禮文島に向ふ

入りし日の名殘かゞよふ波の上に船出の鉦のひゞき流るゝ

日の名殘ほのめく波にゆられゆられ黑き帆船のこに寄來る

島なる香深に着く利尻たゞ眼前に在り

昆布の葉の渦まきゆらぐ岩村にかなしき音して鷗はなけり

昆布の葉の廣葉にのりてゆら〳〵にとゆれかくゆれゆらるゝ鷗

朝冷は單衣をとほし肌着とほし離れ小島の旅人に強ふ

大海のそこひも深くくもりたる旅のあしたの心くらしも

山もくもり海もくもりて北の果のかなしき旅人(たびと)見出しにけれ

ふくろ澗(ま)に烏賊つり船の歸り來れば籠もたる子も母も驅け寄る

利尻嶺の峰に麓に靄すれば雨降るとふをあはれ靄
する

雨雲は利尻の山を大洋のをち方にこそはこび去に
けれ

よる波に立ちては崩れ立ちては崩れ昆布の廣葉の
さわめけるかも

波にもまれ昆布さわだてばむら〳〵に亂れ合ひて
立つあまたの鷗

あれ狂ふ波にすみかをあらされてかなしき鷗磯低
く飛ぶ

沖の鷗かはりがはりに息ふらし波の及ばぬ岩島の
上

大海若かしらの髪のみだるかと波にもまるゝ昆布
生を見るも

鮑取潜水着をば重々とになひて行けり朝寒の町

夢の如荒れのなぎたる磯ばたに岩かきもちて昆布
のよせたる

同じ方に頭をむけてならび居る八萬四千のむらか
もめかも

この島は海邊より高山植物生ひたり

草山の雨後の牧場にはれ〳〵と牛集りて海見おろ
せり

海の風あらく吹くらし山の脊のくぼみに牛のつど
ひ下りたり

みの虫のたち歩む如昆布おひて船よりはこぶ濱の
砂原

滞在數日うれりはいつ迄も大なり

かゝり船同じやうなる檣(はしら)して皆一様にかぶりふり
けり

かゝりゐて夜晝といはずゆられゐるかの船かなし
船人かなし

波くれば立ち波くれば又立ちて鷗は岩にゐならべ
りけり

岩の上にむれゐる鷗同じやうに風に向ひて顔なら
べをり

風や減りけむ待ち待ちて疲れたりけむ

いひ合せたらむ如くにかゝり船みな帆をあげてみ
な出ててゆく

目のさめぬやうに寂しう雨ぎらひ二百十日の夜あけぬるかな

帆前なりに艀をならべゆられながら雨のあしたを荷揚する見ゆ

遠々し北のはてなる島にして二百十日の雨にあふかも

岩裾に潮みちぬればむら鷗高き所に岩うつりせり

うねりにためさるゝ如かゝり船の艫にひかるゝ悲しき傳馬

利尻島なる鬼脇に上る

天鹽の山捲き持ちてこゝによする如島打ゆする波の音かも

潮けぶる海のかなたに低う伏す山あらはして日は
いでにけり

利尻嶺の山のひだなる不斷の雪夕かたまけて淡く
ひかれり

鬼脇を立ちて歸航の途に上る

笹山の笹ところどころ日のさして黄ばみ光れり海
くれむとす

黒ずめる海を抉りてまろ〳〵と夕日は深く沈みゆ
くらし

日の沈む果遠からし夕映の色もうつらず海黒ずめ
り

高山なしうねりうねれる海の面に黄金ながして月
おし照れり

洋上にて夜明く

空の色稍濃くしたる利尻嶺は九月の海の上に晴れたり

海の色やゝ黒ずみて及秘めし恐しさせり九月となれば

やう〳〵に沈み沈みて利尻嶺は頂のみぞ海にのこれる

増毛に上陸す鐵道にはぐれたるこの地は慘らし

浪の音まぢかにひゝく濱町のぽぷらの上の北斗七星

さびれたる港の中に舊き型の北國船が一つ繫(か)れり

留萌に向ふランチより見れば増毛漸う遠ざかる

濱の町石ころなどのやうになりて波の上遠く横をれるかも

留萌

こゝにして遂にわかるかゆさ〳〵に吾をゆすぶり
し天鹽の海に

波よけの堤の上に吾たちて異なる海の二面見る

やうやくに半ば成りたる波よけの堤は早も布の裳
まとへり

青黑き昆布はゆらげり昆布の上にもゆるが如き青
海苔ゆらげり

物々しう雨をふくみてゆすれをるぽぷらの上にみ
だるゝ蜻蛉

札幌に來る風雨强し友の一人は後れて島に殘れり

進み得ず退き得ずて北の果の島わにゆられ君が船
はあらむ

枝豆が市に出れば寒き風やがて吹かむと恐れいひけり

壽都

望の夜のさやけき月は秋風の磯谷歌棄寒う照らせり

秋の月寒う照らしぬむきたての余市林檎の寒き膚を

函館

草の色やゝ黄ばみたる野のをちに秋のうな原遠かがやけり

竿の上に鴉とまりて見おろせる秋の海原風たつらしも

ならべ干せる烏賊の生干(なまび)のするどき香たゞよふ中の裸の子等よ

さゝ舟に水かく櫂の音澄みて靜けき浦にこだまするかも

ふたゝび北海道に向ふ黒松内邊にて

夕風に椴と柏とさゝやけりあやめに似たる花の多き野

白々とぽぷらの裏葉ひるがへし涼しき月は風に乘り來ぬ

小さき發動機船にて岩内より雷電岬へ行く

戸を閉ぢし鰊乾場の板壁に八月の陽は赤々とさす

海若にあらそひかねて崩れ落ちし山の膚のはだれ草かも

雷電の岬のはなの岩山に丈くらべして波のうねれる

船をうちくだくる波の散らばひてわが唇の鹽はゆきかな

雷電に上る前の磯舟も見えず後のも見えぬまでうねり高し

磯舟はうねりにのりてゆれながら輕うすべれり心地よきかな

さみどりのうねりにのりてきら〳〵と日に光りけり鴎の羽は

波の中に波の影して綾おりてかけ去りにけり又來りけり

歸途

雲の峰うしろになして木ぶりよさ松ところどころ丸き草山

三たび北海道に旅す津輕海峽

こしかたも行へもわかぬ迫戸の霧にぬれて冷たしわが旅衣

迫戸をこめし霧はこゞりて寒くふる雨の中よりに
じめる灯見ゆ

札幌郊外なる眞駒内種畜場を觀る

もそろ〳〵つながり歩く豚の子の親ばなれせる見
ればかなしも

柏の樹こゝにかしこに枝はりて大牧草の海に影せ
り

白き花さける牧場の草ふめば馬ならぬ吾も樂しと
おもほゆ

牧草の白けたる穗にくもり日の大き柏は淡き影ひ
く

あまりにもつきまつはりて汝が母に足ふまるゝな
小さき馬の子

青森灣にて夜明く

ひむがしの山をはなるゝ日のかげに入江の白帆皆ひかりけり

四たび北海道に旅し壽都に赴く

秋風は白くひかれる雲ゆりて晴れたる空にさやさやに鳴る

ぽぷらの木默して立てる日ざかりをことり〳〵とめぐれる水車

いたどりの林吹上ぐる海の風まともに吹きて馬つからすも

高ぶれる波の穗にのりよりて來る鷗あやぶみ立見るわれは

いや太にふくらみ來る波の上にふと生れたる船のかなしさ

なみ〳〵とつげるこつぷの麥酒の泡潮風に飛ぶを
見てゐたりけり

五たび北海道に旅す函館

鳥一羽けしき音たてゝ歩きをり雨にあけたる浮棧
橋に

山脊の風つよくあたりてこの鼻に春さへ夏さへ草
生ひしめず

屋根の上に石をのせたる漁師の家ありのことごと
海に向へり

防波堤めぐりし船は俄にも大きうなりて碇おろす
も

枝張し赤たもの陰につよき日ざしよけてつどへり
工夫のむれは

今日は小樽出帆の日なり蟲はいと深し

眞黑に雲おりし海を夕まけてかなしく船の出でんとすらむ

解近よるを得ず往先も心元なしとて濁深き天鹽川口に假泊す

波のまにまゆするゝ艀人間は山なせる荷の上荷なりけり

西ふけば波は折れ又波は折れて天鹽の口はとざされにけり

風にむかひ二聲三聲鳴きし鷗あわたゞしく立ちて又戻りけり

犬の子もゑひにけらしな潮にぬれ人の子どもと共に叫べり

大きくゆたに黑くうねれる波の果に光をさめて日のしづみゆく

艫につけし小さき灯は闇の中にとゆれかくゆれ寂しくもあるか

つるしたる灯のゆらめきに艫のあたりあるかく暗く海の夜更けぬ

波の音ちごのなく聲ちごの如悲しらになく鷗のさけび

とゞまりてうねらるゝ船すゝみつゝゆさぶらるゝしまさりたるべし

利尻なる鬼脇に上陸す

やまと船の帆桁に綱に冲の鷗むらがりて明けぬくもりたるまゝに

とゞ松の林の上のとゞ松の山の上なるくしき峰かも

利尻島の惡太郎鴉いほり來て案山子の上に薯くら
ひをり

親船は同じ處にかゝり居て昨日のやうに打ゆれて
をり

かもめすむ冲の岩鼻烏さへいゆきはゞかる磯の岩
鼻

昆布の葉の汐をはなれし岩陰のひかたに集ふ濱烏
かも

曇に海も見えず山も見えざれば身も細るかと心ぼ
そけれ

心細くふもとにすこし行きたれど曇をふかみ山は
見えなく

同島なる鷲泊に航す

斜戸の風雲ふきはらへむらだてるとゞ松の上には
るゝ山見む

から松のみどりのもすそ遠引きて荒浪の上にたゝ
す嶺はも

黒ずみてくれなんとするとど松の林の上に雪の光
れる

遠く大きく海はひろごる港の山草わけてのぼる一
足ごとに

静かなる港の山の朝の氣をゆりどよもして岩つば
め飛ぶ

秋の日はいてりとほりて北の方オコツク海も油凪
せり

なほ同島なる沓形に回航す

巓に根かゞれる雲かくながら利尻の山に冬は來らしも

沓形は海よりつゞく磐の道夜道危し手火させ子ども

岩にかぶさり岩にかぶさりゆさ〳〵に昆布の廣葉は波にゆらぐも

利尻嶺のうしろ明るくかゞやきぬかなたの空の朝早みかも

北の海二百二十日の風ふけばやう〳〵肌にしみて寒しも

今日もかも別るゝ島を懷しみしみ〳〵朝のしめり土ふむ

鷲泊へ歸る船上

黑くひかる潮ふみさくみ北の海のオコツク海に九月は來る

頭より波のしぶきの打かゝりわが旅衣しほたれにけり

冲の島さやかにはれし朝の海になまこ引き舟みだれたり見ゆ

みなとの青き草山汐風に常なでられて青き草山

留萌

裸の子着物着たる子皆寢たりほの暖かき磯草の上

歸途車上

暴風雨過きし芒大野の上に晴れて大きなる山の目さめたるかも

鳴きつれて鴉は過ぎぬ秋草の露けくさめし朝の野の上

海峡

舳にさくる波のしぶきにきら〳〵と陽がさして迫戸の雨はれにけり

甲板の枠につながれしと〳〵と潮けにぬれて立てる馬はや

枠に入れて船にのせられし馬と馬あがきもせずてむかひあひたり

六たび北海道への途すがら

水刎ねて皆一齊にとびたちぬ頭も羽ねも黒き水鳥

日未だ出でずぽぷらの並木さら〳〵と雨なす音をたてゝそよげり

楢の木の下にしげれる熊笹に夜の露おり月ふけにけり

登別温泉

くえ落ちし赤土山の山肌にしめりかなしく湯氣のはしるも

湯の煙むら〳〵湧きて崩れおちし山の赤肌つたひのぼらく

傷ある鳥なれかもや湯けぶりのまつはる山の岩かどに鳴く

軍艦に便乘して室蘭より函館に來る夜

ハンモックの下に正しくならびたる靴をし見ればなみだぐましき

ハンモックのふくれ下れる下をくゞりせぐくみあるく路のはるけさ

副長も夜食におりて甲板の椅子に冷たく露おりにけり

函樽線汽車中

この嵐にさからひもがく鴉汝も夕べになれば家や戀しき

玉蜀黍にとりまかれたる一つ家の影さびしらに夕べは來る

七たび北海道に旅す札幌にて

から松の大木の若葉ぽつ〳〵と青き球なし未だほぐれず

今もかもほぐれむとする唐松の若芽にむかひ朝を靜けし

唐松の玉芽すがしみたちて見る板椽の冷の足にしむかも

朝の日をすひてひかれる唐松の玉芽を見つゝ心しづけし

天そゝるたもの大木は手を洗ふシャボンの泡にうつりて親し

入たび北海道に旅す積丹とその途上

落葉松の枝毎葉ごとゆぶ〳〵と露に太りて夜明けたるかも

その翼陸につくまで全かれ海の上遠くまよひ飛ぶ蝶

かゝりたるやまと帆前にひつそりと一羽の鷗とまりてありけり

北の海の西の果なる神威岬そこにともしく灯がともりけり

山鼻に沖の鷗の色したる小さき家一つさびしく立てり

昆布の葉の赤くたゞれし磯の上に舟よりおりてその舟を引く

入舸

かゝり船の檣の上にはろ〳〵と岬の燈やめて又ひかる

岩の上につどひ餘れる鷗かも船の帆桁に並びとまれる

いち早く一羽の鷗沖にゆけばむれゐる鷗みな沖にゆく

秋の夜の月おしてれり地にしみし鰊の匂ほのかなる濱に

美國

幼なき子どもにかへりまるゆでの玉蜀黍にわれうつゝなし

余市に向ふ海路

丸き山尖れる山と相向ひ默せる中のさ青なる海
岩山の千年默せる山裾をゆすぶる如き波のおとかも

小樽より燒尻へ

海に向ひ船の名をよぶ聲長くみなとの山に徘するかも

船上猫を見るあるべからざるものゝやうに目を見はる

船の上に肥たる猫よ足裏に土はつかずて終るべきかも

海にそふ低き山なみ山の上に拔け出でて帆は光りたりけり

海の上に月赤々とおしてりて二百二十日を油凪せり

鷗はかなしき鳥よよそむきになりしは唯の一羽もあらず

札幌大通の角々

札幌の廣き通の夜冷えて玉蜀黍をやく香ながるゝ

東北線

日の入りし山のかや原ほのあかみ靜かにわたる風のあと見ゆ

南の海

母の國伊豫へ急行す途に母の死に會はず

古里の道三百里くれど〳〵枯木立なりかなしき古さと

はるかなるくらがり路をさぐり〳〵母なき母の家を訪ふかな

わが罪をかばひて父とあらがひし尊き御口とはにとざせり

血をひける男のみ來て夜の山に柩をさむるくらきともし火

赤土の底ひつめたき山の穴にひつぎ舁おろし誰も物言はず

母のひつぎをさめてをれば脊筋より濕りし土の冷えをおぼゆる

病める母がこもりゐしてふ奥の間に何もせずして日を七日經ぬ

歸途

船はゆく艫のまうしろに殘したる故郷の山遠ざかりゆく

日は西に伊豫の方より遠くより夕べの色のふかく
なりゆく

池の如き海のこなたの尾の道も知らずて母は逝き
ましにけり

母の爲め遠をろがみぬ朝もやに夢のやうなる京の
御寺

二たび母の國へ

古さとの八はたの杜の木の芽だち舳先にひかり近
々と見ゆ

時得たる男兒さびして海の風に白帆ひからせ波わ
けて行く

負ふ子なす綱にむすびて大船の艫につけたる小舟
かなしも

艦の旗ほばしらの旗皆あげて港に入ると船よそひ
せり

白波の八百重のをちにさかりゆきてふるさとの山
面がはりせり

大船のあふりをくひし小舟にも似たる人かないと
しき人かな

歸路東海道線

夕づく日ほのめく伊豆の山はなに舳先をむけて船
ひきおろす

三たび母の國へ

父もふみ母もふみけむ土の香のその香にしあれや
懐しその土

焚おとしほの柔かにあたたかき炬燵にいねて山の
雪見る

母さへに座さずなりしふるさとはつめたく雪にうもれけるかも

長濱にて

伊豫人がするわらはやみ海もして日をおきて凪ぎ日をおきて荒る

なつかしき島低く小さくやう〳〵に海の下びに沈まむとせり

歸路郷里を遠見つゝ船にて

我が魂のぬけいでて飛ぶ鳥なれや日の入る方へ古里の方へ

我が船の艫の眞うしろ島と島の中おしわけて日は入らむとす

夜深く神戸に上る

有明の月かげさむき棧橋にはねかへるごときわが靴の音

霜こほる有明月夜棧橋の長きをわたるまだ夜ぶかきに

讃岐引田より鳴門に廻る

雨すひてしつとり黑き土の上に落ちてひかれり夏蜜柑の果

雨つけし南の風に鈴なりのみかん危くゆれてゐるかも

いち早くたきち流るゝはしり潮青く澄みたる海に注げり

白雲のむらがる中におのづから光る雲あり富士にしあるらし

阿波への途すがら

朝立ちのいそがはしさに病める子の顔も見ず來てわれ悔いにけり

動もすればやつれしちごのうかび來るかなしき旅の眼をのろひけり

竹むらの竹の下道ゆく人のから傘させり小雨すらしも

重々しき大竹もりのしづもりに山より雨のおろし來る見ゆ

春の雨しづかにあびて竹むらの竹ことごとく身じろきもせず

土佐にて

五月雲港の上を亂れ飛び出帆旗いつかおろされにけり

風をいたみ傘帆の傘もひらかずてこぎかへる見ればさびしきものを

大きくゆたにうねれる海の上を岬の灯影さやに走れり

もどかしき船にもあるかな牛ならば鼻縄ひきてししとおはましを

浪の飛沫

永代橋畔に在りて

橋のあるとなきとをきはやかに隔てゝしらめり鐵大橋

かゝり船桁といふ桁ことごとくかけしぬれ帆に日はけぶらへり

干潟にそこれる船はよき潮を待ちの久しみ吾にかも似る

むら〳〵と沖のかもめは上げ汐におしよせられて河をのぼるも

艫にして火を焚く烟黒ずみし帆に餘りたる風になびけり

ぬりたての船のペンキの白き色ひとりひかりて川たそがるる

聲高(こわだか)にのゝしる舸子が赤き顔艫に焚く火の火明(ほあかり)に見ゆ

ゆら〳〵に船にたく火の火かげゆれて水面(みのも)大かた夕さりにけり

寒まゐり鈴打ふりて橋を過ぐ夜の出船に灯があかうつく

彗星つどへる如く船の灯はみな尾をひきて雨にならべり

二月の風硝子戸にふるふ夜すがらをやぶれし船の表つくるかな

水の上に町を作れり大船も小舟もよりて町をつくれり

かゝりゐる間を久しみか引上げし舵から〳〵にからびたるかも

わら箒手に手にとりて艫を洗ふ舷をあらふどの舟もどの舟も

青竹の水棹を艫ゆ斜に立てゝ白き襦袢をならべ干
したり

くぢや〳〵とむらがりかゝる舟の上に赤き衣して
遊べる子供

子らが着たる赤きジャケツを恐れ見てむらがり飛
ぶか船の上の鷗

春の日のうらゝにさせる艫にゆき舳にゆき子等は
飽く時を知らず

よろ〳〵と船ばたありく稚子に春を見すれど春に
はよらず

潮まちをする間のどかに春日浴びて船頭の妻は縫
物しをり

船がかり久しからしも艶々しく髪とりあげたり船頭の妻は

一つ船にあまたの水手の集まりて鷗の如く皆沖邊見る

碇今水をはなれんとす水つきし棕櫚繩の輪は堆くなりて

大正十年四月五日印刷
大正十年四月十日發行

定價金壹圓

編輯兼發行者　佐佐木信綱　東京市淺草區黒船町二十八番地
印刷所　東京オフセット印刷株式會社　東京市日本橋區本石町一丁目一番地
發行所　竹柏會出版部　電話本局五一七〇番　振替口座東京四三〇〇番
發賣元　東京堂　東京市神田區表神保町三番地

鷗
不許複製

竹柏會同人著作書目

歌集

佐佐木信綱著 改訂 おもひ草（六版） 正價八拾五錢 郵稅八錢

同 上 新月（四版） 正價八拾五錢 郵稅八錢

松本初子著 藤むすめ（再版） 正價七拾錢 郵稅六錢

白蓮著 蹈繪（六版） 正價壹圓五拾錢 郵稅八錢

川田順著 伎藝天（五版） 正價壹圓貳拾錢 郵稅八錢

同 上 陽炎 正價壹圓五拾錢 郵稅八錢

樺山常子著 富士の裾野 正價壹圓六拾錢 郵稅八錢

九條武子著 金鈴（三版） 正價貳圓 郵稅八錢

歌學書

佐佐木信綱著 增訂 日本歌學史（三版） 正價貳圓四拾錢 郵稅拾貳錢

佐佐木信綱著　萬葉集選釋（七版）　正價貳圓五拾錢　郵稅八錢

同　上評釋　ポケット萬葉集（三版）　正價壹圓貳拾錢　郵稅六錢

同　上明治天皇御製謹註　やまと心（四版）　正價壹圓　郵稅八錢

同　上和歌百話（再版）　正價貳圓四拾錢　郵稅八錢

同　上和歌入門（十五版）　正價壹圓四拾錢　郵稅八錢

文藝書

佐佐木信綱編　和歌名所めぐり（再版）　正價壹圓六拾錢　郵稅六錢

松村みね子譯（シング作）　いたづらもの　正價八拾錢　郵稅八錢

同　上（ショオ作）　船長の改宗　正價八拾錢　郵稅八錢

石井きぬ子著　小說　蔓草　正價壹圓　郵稅八錢

雜誌

竹柏會編纂　心の華　半年壹圓九拾錢　一年參圓六拾錢

心の華

「心の華」は、和歌を中心とせる月刊文藝雜誌にて、文學博士佐佐木信綱氏を主幹とし、石榑千亦氏を主筆とす。和歌革新の運動おこりてより廿餘年、新派歌壇の機關として世に出でつる雜誌幾許といふを知らず。しかもその操守一貫、歌壇の激流に棹さして、益々その面目を發揮し、その理想の國に近づかむとするものは、實にわが「心の華」なり。新しき詩歌に志す人の爲に、教養の根據となり、研究の指針たるものは、今の文壇、本誌をおきて他に見ることなからむ。